蓮聖人の考え方からすれば、それは実践となっていなければならないのである。それが、『立正安国論』に則していえば、諫暁になる。その諫暁の今、人類に対する諫暁とすれば、私は、核戦争をこの世からなくしていくということが大事だと思う。今こそ、仏教の原理で世界に向って諫暁していく時期にきたのではないだろうか。一例をあげてみると、日本山妙法寺の藤井日達師がおられる。アメリカでも共鳴する人達も多く、我々も日本山妙法寺に学ぶべきものがあると思う。

最後に、ＮＨＫの放送世論調査を見て考えたことであるが、仏教というものがまだ日本国民の中には重要な要素を占めているのではないだろうか。そうであるならば、我々が本当の仏教を教えていくことが必要である。今後、我々がそれぞれの布教活動の中で生かすためのより強力な態勢をつくっていかなければならない。

《特別報告要旨》

南無の会活動について

酒井　謙祐
（東京・実相寺住職）

信徒に南無とは何かといっても、南無妙法蓮華経とは知っているが、南無と切りはなすと、答えられない人が多い。心からの信仰は南無にはじまり南無に終り、この南無が生きて心の中に入っていず、これは大変なことで、これを蘇生させる必要がある。南無の会の創造はここにある。少年時代の理想が、ある年齢がくると、現実は甘くないといわれる日常生活に、私達は根本的なものを失っている。その中で僧侶だけは理想を持続けてやっていくと、それが仏性を掘りおこし南無を掘りおこすことになる。人間が日常生活どういうことをベースにして生きているのか、やはり心をベースにして考えることが大切で、その根底には、やさしさ・思いやり・いたわりを通して物事を考えていく、その気持を育てていく、その心

が南無の心を作っている。自分達で考え、自分達で実行し、自分達で掘りおこすということを協調してやっていくことが大切である

南無の会を作った動機は、ある少年が「お坊さんと知り合うにはどうしたらよいのですか」というのがきっかけであった。少年は寺の敷居をまたいだがことわられたらしい。これは大変なことだと思った。こういう若者に何か関わりがある場所ができたならばと考え、昔の辻に代わるものに、不特定多数の人が気軽に入れる喫茶店をえらんでみた。原宿にヤシカ、ほんだ二店のビルの地下室を借りて七十人位入れる席でナームと名づけた。これは私達にとって新寺建立と同じだった。一週間に一回午後七～九時、気安い場所にしたいと思ったが、当初は思うように行かなかったのが、辻説法そのものでいこう、真剣に取り組めば、相手は真剣になってくれると反省してから、人の入りが多く満席になった。十代から八十代いろいろな人が来、一時間の話、一時間の質疑応答、五百円（三百円茶、二百円通信費）を茶代とした。やっているうちに会場提供者が出て、現在は原宿・霞ケ関・吉祥寺の三ケ所でやっており、足かけ八年になるが、通仏教が主なので各分野から専門の話をしてほしいとの声が出て、いまそのための円・水・土の集いを開いている。

そして南無の会は、辻説法・月刊ナーム・南無行の三本柱で活動し、八ケ岳道場・千葉の大多喜道場を開いて、少年から老人それぞれが生活を通して南無していくということをやろうとしている。

私の教化活動

宗川円学
（埼玉・正法寺住職）

神秘は神秘である故に結論が出ないので、人は取りつき易いが、人間は、自分で納得しなければ、信仰を全うすることができず、信仰生活に入ると、神秘のみでは通らない時がくる。私は神秘的なものを、お題目信仰の世界へ導く手段と考えている。神秘の世界は奥深く幅広く、最後は日蓮聖人の教えにすがりつくより他なく、われわ

れ皆で勉強する形に持っていき、勉強会に来る人は増えている。お題目によって心を磨けという聖人の訓えに従って自分を磨いて今日まで来て、一人の口こみがきっかけで、いま二千人以上に唱題の輪が広がった。そういう点で、私は一対一の布教が大切だと確信している。相談事には教学のわかる弟子が当り、私は掃除・草むしりをやっている。布教には根気と忍耐と、師匠と弟子の協力が必要であって、自分の持てる能力で事に当っている。寺に来るのはお題目を求めてか、または関心のある人なので、それに応える必要があり、寺が浄土という環境づくりに求め来る人を参加させ、清掃などさせていく中で聖人の教えを話す。

欠点多い存在である自分を率直に認めることから出発することは、僧俗同じである。題目を唱えればいいのだという信仰では、一般の人の心の中には入っていかれないのではないか。大衆の心に入るには、自ら大衆の心を持ち、坊主がまず懺悔し積極的な心がまえを持つことである。私はボロ寺に入って布教の一途を歩んだ。私は神経がとぎすまされて少し霊感があるようだが、授けられた能力をお題目信者を作りあげるために活用してきた。

体験からいうと、布教というものは、人間中心、何もないもの、我身だけしかあてにならない人間には能力を補うしかない、それには精進して力を作らねばならない、我身が支えで自身の能力を磨くほかない、それも大衆の中で磨いていくより法はない。そのためには、逆境布教の中で自分を磨いていくのが何よりもよく、そこに、真の法華経の行者は真剣にやればやる程苦難にみちてくるという聖人の心情に共感できる。豊かな生活の中からお題目を説いても真剣な信者は生まれず、僧侶が苦しみの中で布教している姿こそ法華経の行者である。宗門の中で偉いといわれている僧侶でも、大衆の前に出ると、使いものにならない僧が多いといわれているが、布教には、苦しんでいる大衆を忘れてはいけないと思う。

布教には、十界十如是三世間の活釈を基本としているが、現実に即した活きた解釈をもっと研究してほしい。現世利益は現世利益を否定することから始まるのではないか。これをいかに教えるか、それが程度の高いお題目といわれるのではないか、そして現世利益のとらえ方を

積極的にしていく。布教家は自身の人間性を磨き、逆境に自らを求める姿勢があらねばならない。諸神の力を借りようともお題目に結びつける勇気と精神が必要であって、あれもなければこれもないといっているような甘えのある布教は、害になっても、益にはならない。人間を磨くために、人間は主役である。

第二回国連軍縮特別総会に参加して

―シアトルのあつい二日間―

石田良正
（京都・大輪院住職）

それは、私にとって気候が暑いというのでなく、心のホットな二日間であった。私は、核廃絶の署名カンパを行ない、代表派遣の運動に取組んで十日間のニューヨークでの抗議行動を終了して帰途、シアトルに入った。それは日本山妙法寺の仏舎利塔供養法要参加のためであったが、私は、その時の藤井日達師のバンカーにおける仏舎利塔建立への運動や撃鼓唱題活動へのレーガン政権の妨害などの経過報告をきき、そして、核反対運動のため人の心を変えようとするならば、自らを変革しなければならないと自らを認識した、ミサイル設計技師ロバート・ウォルトリッチ氏の反核運動への転換などをきいて、信仰実践の厳しさを感じた。人の心を変えていく政策、戦争でなく平和を希求していく政策をさせることを要求していく、戦争でもしようかという一部の人の心をかえることなしには、平和はこない、というなん人もの意識が、あのニューヨークの百万人抗議行動となった。シアトルで、宿近くのキリスト教会に牧師をたずね、師から長年たずさわってきている黒人の市民運動・障害者問題・軍事費半分拒否運動などの信仰体験をきかされて、なんじ敵を愛せよの心でせまって政策を考えていくという師の使命感に、私は日蓮聖人の諫暁の精神に相通じるものを看取した。そしてその牧師は、「祈りの行動は私の生命である」「しかし祈っているだけではだめであって、行動をすることによってはじめてその証しとなるのだ」といった。われわれは一体何をするかが大事であり、そ

れは信仰者としての基本的な態度である、と私は師の情熱に接してあらためて認識し、これをあつい心で受けとめたのである。

抗議集会における宗教者集会は、人間として真実に生きる道を追求し実行する、核兵器の存在そのものが罪悪である、宗教教義が悪用されてはならないことなどを確認した。この熱い感動で私は心を新たにしているが、生命を守っていくという立正平和の志をもって努力していくことは、立派な信仰活動であることを再認識し、今後の出発としたい。檀信徒の生活や商売繁盛なども結構ではあるが、信仰活動がそれのみでおわってしまっては、宗教者としてむなしいのではないか。信徒活動と同時に、もっと視野を広げて大きな問題にも、目をむけ、宗教者としての発言を行ない、わたしたちは大うなばらに出て、平和とは何かを問うていかなければならないのではないかと、シアトルを訪れ、心をさらに一新したのである。

（注）基調講演・特別報告は、現宗研所員望月兼雄・高橋謙祐がまとめた要旨である。

部会報告

第一部会〈教学・社会問題合同部会〉
遠忌後の教化活動をめざして

一、基調講演と映画「人間をかえせ」を見聞して、

◎核戦争による人類滅亡の講演を切実、かつ深刻に聞いた。広島で被爆者の悲惨な姿を見た。それゆえに核の絶滅を訴えたい。

◎映画をみて戦慄をおぼえた。日蓮宗で太平洋戦争の反省をしなければならない。戦争反対・核反対は全人類的なものである。

◎戦争に参加した者として、その体験から今は本当に懺悔している。日蓮聖人のように、大きな視野に立ってどう運動をすすめるかを追求しなければならないと感じている。

◎我々には、加害者としての反省が必要である。世界の核廃絶運動に一教師として何かしたいと考えている。

◎日本海で限定核戦争を前提とした日米共同演習が行なわ